わが愛する歌 名歌鑑賞—

二反田

實

残生の光となさむ吾が歌の原点に燃ゆぬくき囲炉裏火

清

田

湯気と囲炉裏は山里の人間には二つで一つのものです。 奥田清歌集『炉端』(二〇〇八年刊)所収。

ゆげはにほひであ

り形であり、生きることそのものの証明かもしれません。

唯々、導かれてそして又導かれてこの場に在る自分をほんとうに不思議に

歌集の第一首と第二首はひびきあって心の中深くに今もある「ふるさと」が 思わずにはいられないものです。それぞれの人に「原点」がある様に、 「原点」である「自分(奥田先生)」を、高らかに宣したものと思われます。 . この

の音の中に浮ばせて生きるならば、必ずや「ふるさと」は光となってその先 が、「残生」はまだこれからの「いただきもの(宝)」として、ゆるやかな波 年は「取るもの」でなく「頂くもの」であると聞かされたことがあります

うのがありますが、この炉端の歌は、 を照らしてくれるものと思われます。 芥川の歌に「海は今青き眶をしばたゝき静かに夜を待てるならじか」とい 血につながる歌であるとして、少しの笑みをたゝえて心の中では大 私の「海」であり「川」であり「山」

声で、なきながら読み返す歌としてあります。

力と考える。 あるとともに「するどい感性」や「豊かな感性」な などを含む心の能力。 刺激に反応するもの。また、感受性や情意欲求、感 ク」だ。感性とは外界からの感覚情報を受容し、経 る領域での、人間と社会のビジョンを作るコンセプ は「衣・食・住から環境・生命・情報にいたる感性 その中に「感性哲学部会」という部会がある。その 年創立のまだ若い学会だが、急速に会員が増えてい ス (感性) に受動的なものではなく、むしろ創造性をもった能 春を言祝ぎ、 [本感性工学会] という学会をご存知だろうか は情報量に比例する」と定義する。 したがって、感性工学の研究におい 年の御多幸を心より祈念申 しかし、感性は心に深く感じ ・し上げます。

出来る。 私達は努力する事によって、豊かな情報量 者の日々の 表現し 獲得し、 私達は短歌を批評する時に、 がちであるが、 感性が研かれその結果として良い 努力の賜であると改めて知らされる。したがっ 感性は決して天与のものでは無く その感性は作者天与 歌を創作する事が (学問・知識)を て、

文法講座

作品Ⅱ

そうか もう三十年も経ったの

作歌の目・作歌の技法

(第六十回)

飛騨吟行会 …………

の中 間ではないと思っていたが、 なるなり」と述べている。私は自分が決して感性の豊かな人 江戸 歌を作ろうと思う。 ·で、「下手は上手の下地なり。 下手よりだんだん上手に 時代初期 0 ·読み物作者・寒河正観は、 今年は一念発起、感性を研いて その著 「子孫鑑

支部報告

編集後記

イ ラスト

·阿部正

歌帖余白

(七十三)

太陽の舟 目 次

| | 1 | くマアヨヨ | | | | 無く、作 |
|---|-----|-------------|------------|--------------|-----------|---------------------------------|
| : | 邦彦 | 髙﨑 | | (二九九号) · | 秀歌抜芳(| 0 1 |
| | 全子 | · 渡 辺 | 酒向一次 | | | |
| : | 7澄江 | ・土方 | 角田順子·土方澄江: | | 選者十首・ | \(\begin{align*} |
| | | | | (座談会) … | 合 評 (| は「セン |
| i | 賀子 | 山本 | : | (作品Ⅱ) | | 動的な影 |
| : | 彩紀子 | 吉岡攸 | : | 十一月号批評(作品Ⅰ) | 十一月号批 | どと、単 |
| : | に他 | 岡崎く | | | 作品I :: | る能力で |
| : | 豪 | 豊泉 | : | 第七十五回) | 歌誌散見(| 情、情緒 |
| : | 宏明 | 須藤 宏明 | : | 阿部正路論(第九十九回) | 阿部正路論 | 一験に伴う |
| : | 京郎 | 丸山老 | | 八十年の鼓動 | 年頭所感• | ト・ワー |
| : | 貴美 | 川村 | | 「年頭随想」 | 「年頭随想」 | のかかわ |
| : | 寛 | 原田 | | 二十五首詠 | 二十五首詠 | 位置付け |
| : | 邦彦 | 髙﨑 | | | 巻頭言 … | るという。 |
| | 實 | 二反田 | | 歌 —名歌鑑賞 | わが愛する歌 | 平成十 |
| | | | | | | 6,100 |

5

2 1

4

20 19 18

8 7 6

誘惑

原

 \mathbb{H}

寬

悲しさが水より透明に延びてゆく靴裏の釘増殖してる

ナプキンの端で上手に口拭い果てることなく繋る命

足音が遠い闇から吹いてくるじりじり縮まる痛い聴覚我儘な人生論を断言し可能な限りに誇示する存在

たわいない夢の話は辞めました勾配のある夜が重たい夕映えの細波一面に滲みとおり甘い死誘う遠い鐘の音

枯 れ か けたかすかな匂い消しゴムで無理に消してる朝 の欲望

歯ぎしりのような階級見送りの義理人情の寂しい眺め飢えている湿った思想冬の夜につきまとう蝿一つの囀り

ぎしぎしと扉を押した ダンゴ虫そろそろ歩く夜の傾き蛇の目をしている男やせた頬ぷくぷく動き卵を割った

言葉なく投影される 覚束かぬ夢が欠けてる柔い風

風景を舐めるように飛んでいる幻想の蝶長すぎる影

残照にふるえる欲望恥じらいと殺意の交叉紫の影追い詰めていた論理あり茫々と笑い始めた腹立たしい柔軟

北風に追われて犬が濡れている 鳥の影が首を傾げた山かすめ細かい雨が音もなく芽吹きの前の木肌を濡らす

似顔絵が仮面に似てる笑うこと忘れてしまい疲れた眼夕焼けの空に過去が蘇える無音で哀しい雫の一滴

急速に老いを覚える自負心が手放せないで粘土捏ねてる夕暮が気がねしながら寄ってくる静かな影が甘い死誘う

柿一つ坐りの悪いベンチ上ころんとしてる面倒もなく親指の爪の赤身がうすくなる軒端の陰に薄陽が迷う

何となく不満な音を立てている手鏡の中甘い習性風の音カラカラと鳴る冬の夜深い眠りに時計が止まる

年頭随想

川村貴美

明けわたる・今日といふ手付かずの未来たっぷりとわが掌に乗せて夜の

交代劇があったりして、政治、経済、外交等に於いても難しが築いて来た目を瞠るばかりの進歩発展の傍ら、昨年は政権で新年を迎えました。二十一世紀も十年が経ち、戦後、国民で新年を迎えました。二十一世紀も十年が経ち、戦後、国民明けましておめでとうございます。二○一○年一月号(三明けましておめでとうございます。二○一○年一月号(三

い時代に入って来ているようです。

扨、頭初の短歌ですが、極月のある朝、早く目が覚めてべれ、頭初の短歌ですが、極月のある朝、早く目が覚めて来たい。と両の掌に乗っているのだ。私がどう料理してもいい時が漂って来ます。そうだ、今日という手付かずの未来がたっか漂って来ます。そうだ、今日という手付かずの未来がたっか。としている。

里戻って来るという故事に倣った由)というので、叔母が毎の数だけ赤糸の玉を結ぶことができる(虎は千里行っても千生れの女の人は戦地に赴く兵士のため、千人針の腹巻に年齢思えば戦が無くて六十余年、今年は寅年とやら、五黄の寅

他の生れの女の人は一つしか赤玉を刺せなかったのです。日のように頼まれて針を動かしていた事を思い出しました。

たと聞いていますが、真実、ゆめ、まぼろしです。天の内に比ぶれば 夢 幻のごとくなり」と幸若・敦盛を謡っを迎えます。何と月日の経つことの速いことか。信長が「化っ方、私事ですが、私の長子も寅年生れですから今年還暦

・スケジュールに追はれ来しのみ思ほへばその日暮らしの来

し方ならむ

って来た「いまを生かす」という生命観に繋がるのではない見出し、短歌作りに心を寄せてゆくことが、古来日本人が培りです。併し私達、平凡な日々の中に身近な生の輝きを感じ、寿革命と稱ばれる時代。見込みのつかないこれからが気掛か入十五歳の今日まで懸命に生きて来た積りですが、世は長

かとこの頃考えています。

すが やかな倦まざる努力が能力を引き出し 色の研究」で語っているとか。才能もさる事ながら日々の嫋 え得る能力をいう〉と名探偵シャーロック・ホームズが 越えての栄冠と聞いています。 0 年を始めたいと望んでいます。 スポーツ面を見ましても、ゴルフの石川遼、 ゴジラ、 〈天才〉なのでしょうか。夫々に辛い時期 水泳の北島等、華々しい偉業を成し遂げ 〈天才とは際限なく苦痛に耐 て呉れると解釈し 野球の を何度も ていま イ ・チロ

余生でも残り生でもないあたらしき生と思はむ八十五歳

年預所感 八十年の鼓動

丸 山 孝一郎

館でのトレーニングを始めた。加齢現象を抑え体力維持を図るためウォーキングと市の体育新年が明け二日目で八十歳の誕生日を迎えた。数年前から

元のさまざまな姿に接することも楽しみの一つである。 ビール工場での試飲、 誌の七首詠に五回ほど掲載させて頂いた。ブルーベリー摘み、 公園などを訪ねながら歩いている。これらの情景の一部は歌 晩秋の紅葉を愛でるとともに地元の隠れた名所、旧跡、寺院、 きながら、春爛漫の桜並木、若葉萌える新緑、 多摩丘陵の里山にはまだこんなに自然が残っていたのかと驚 などの普段人の余り通らない道を世話役が設定してくれる。 て歩いている。それもなるべく街中を避け脇道、裏道、 で、一年を通し月一乃至二回程度、 ウォーキングは多数の仲間と町田 日常の街の騒音から離れ自然にも時間にも穏やかな流れの 鶴見川の源流や谷戸を訪ねるなど、 一回10~20㎞を一日かけ 市近郊の山野を歩くも 枯葉踏みつつ 山林 地 0

た関西、東北の方もわざわざ参加されていた。 先日もこの会の様子がNHKテレビで紹介され、それを見ある。そのなかで歌の題材探しは忘れないようにしたい。なかに身を任せていられる年齢になってきたと感ずる昨今で

の風転びあう道の辺に柿の葉踏みて冬の声聞く

のところ百三十台であるが、たまに百五十近くになることが拍はそう変動がないので血圧の値をいつも気にしている。今と体重、血圧、脈拍を測定するのが決まりである。体重や脈トレーニングのなかで気がついたことがある。毎回入所する下レーニングのなかで気がついたことがある。毎回入所するのところ百三十台であるが、たまに百五十近くになることが拍はそう変動のほか、指導員から整体ストレッチを受けている。その運動のほか、指導員から整体ストレッチを受けている。その

あり、深呼吸をして計り直している。

の往復運動をする精密機械を作ることは不可能であろう。を続けているわけである。早速トレーニングマシンで歩きなき続けているわけである。早速トレーニングマシンで歩きなな数字になり頭で計算することは出来なくなってしまった。な数字になり頭で計算することは出来なくなってしまった。な数字になり頭で計算することは出来なくなってしまった。でき数字になるのである。最近の技術を使っても、これだけべき数字になるのである。最近の技術を使っても、これだけでき数字になるのである。最近の技術を使っても、これだけできない。

感謝したい。
・心臓に有難うと言うとともに、健康に生んでくれた両親にくれたものだと、つくづく感心する。

今まで暴飲暴食、二日酔と過酷な運動の負担を掛け続けて

八十歳で二十九億四千三百万回になった、

気がつけば脈を打つこと星の数老いても続くいのちの

阿部正路論(第九十九回)

阿部正路論

須 藤 宏 明

―物語の深部を読む洞察力―

からである。 うな御顔 御釈迦様が悲しそうな御顔をなさったとあるが、その悲しそ 楽のように暗の底へまっさかさまに落ちこんでいったあと、 き落とす論理をほとんど私は憎む。 非情さについてであった。ひきあげて置いて、あと一歩で突 で、私が最初に感じた怖ろしさは、 対し、阿部正路は、 物語の主体は、本当に犍陀多にあるのだろうか。この問題に し、果たして、この物語は、このような読みで良いのだろうか。 が流布し、 うとしたことの罪悪を戒める教訓話として読まれ、 可能となるのか。それは、 芥川龍之介の 迦に置いていることがわかる。 の何という残酷さ。 教育の現場でもそのように教えられて来た。 犍陀多の言動を、 -四頁)と提 蜘蛛の糸」 あの高名な芥川の『蜘蛛の糸』を読ん 言している。 は 犍陀多に人間の本性を見 (『疎外者の文学』 楓桜社・昭和 人間の本性として容認してい 犍陀多が我が身一人助 この釈迦のたぐいまれな 小説では、犍陀多が、 阿部は、この物語 何故このような読 その読み ている しか かろ 独 0

也状で一方にこれでいるのだ。るから、このような読みとなるのだ。

死を避けて屍骸の髪の毛を抜くことは悪なのかとい り返し、 己の生を求めて他者を蹴落とすことは、 である。それを悪と決めつけることの是非、これを芥川 のだろうか。 いの細い蜘蛛の糸が垂れて来ることは、 パニック状態である。このような時、 (を日常として生きている人間にとって、 文学として問う。 人間が、生き延びることを希求することは本性 「羅生門」然りである。老婆が餓 非日常 果たして悪と言える 人間がただひたすら である。 ・う問

む 在るがままにし れんでいる偽善である。高踏である。 哀れんでいるのだ。 よい。下界の人間を、 釈迦様のお目から見ると、浅間しく思しめされたのでござい ら目線である。 ませう。」と描く。これは、今はやりの言葉で言えば、 のではなく、 だが、このような人間、すなわち犍陀多に対して、芥川 この現実に対して、 この物語に即すなら、 深部を読む阿部の洞察がここにある。 て置くがよい。と寸断する。 痛みの無い場所から、 愚かな浅ましい者として、 阿部は、 地 お釈迦様目線と言って しかし、これが現実だ。 獄に在るものは地獄 痛んでいる者を哀 物語の表層を読 切り離して は お

浅ましいと言えば、実に浅ましい。これが現実

愚かである。

つ欲求を本能として有している。これが、

愚かだと言えば、

である。

と、犍陀多が「自分一人でさへ断れさうな」糸を守ろうとす

ることは同質の問いである。根本的に、人間は個人の生を保

ų 散見 第七十五回 泉 豪

韻 2

韻 十一号 (〇九年九月) より、 短歌作品を鑑賞する。

•二〇〇五年の日記たまたま捲りおりプラス四 年の月日悔し 琴子

結句「悔しも」がやや強過ぎるかもしれない。さりげない日 ことができなかった〉という思いが充分に読み取れるので、 る。「プラス四年」というそっけない表現に、 自分は何をしていたんだろうと、情けない気持ちになってい 四年前の日記をたまたま捲っていて、この四年間 誰でもが持つふとした思いを捉えている。 〈結局何も為す いったい

いし『樹木の辞典』の持ち重り森の重さと思うは愉し

のだろう。本を愛しく思う気持ちに共感が持てる。 かった本を手に入れ、その重さを喜びとして噛み締めている つまり本そのものが「森」であると感じている。作者は欲 だろうが、その重みが本の内容である「樹木」の重みであり、 感じることである。 持ち重り」は持っているうちに重さが増してくるように 辞典であるから実際に重量のある本なの 橋本 昤子

である。

なお、「海馬」はセイウチ、トドの別称でもある。

•

嘉子

蒼穹と樹林のみどりの碧瑠璃湛ふ

沼といふ大いなる甕

浮かび、その「甕」のような重量感がこころに残る。 ろうか。青空と樹木を映して深く碧く澄んだ沼の様子が目に るのに対し、村岡の作は写生的な表現にもなっている点であ なるところは対象のスケールと、河野の作がより観念的であ そのもので一首が成り立っているところが共通している。 る昏き器を近江と言へり」を思い出した。 読して河野裕子の歌 「たつぷりと真水を抱きてしづも 効果的 な比

・乗り越してしまひし降車駅うらら日の野の陽炎も海馬もう

丹治

らうら

に まない。文字面も語感の上でも、「海馬」がまさにぴっ うととして、電車を乗り越してしまったというのだろう。 ように、自分の脳も時間空間の感覚を失って、あるいはうと 行う」(広辞苑)のだそうである。「うらら日の野の陽炎」の 感覚入力に応じて時間空間情報を認知し、 海馬とは「古い大脳皮質(古皮質)の部分」で、「種々の 〈脳〉では表現が直接的過ぎ、この一首の描く風景に馴染 一種の統合作用を たり 仮

何枚もウソの重ね着してみても我慢できないこのうそ寒さ PART1」中の一首である。 佐々木 語呂合わ

せ| れる部分があるように思った。 成功しているとは言えないかもしれないが、 た「嘘八百人一首 嘘、それも自分につく嘘という重いテーマを饒舌調で歌 掛け詞というべきだろうか―を用いた掲出歌は、 人間 の真実に触

十一月批評(作品工)

吉岡悠紀子

・俄か雨上りし雲の切れ間より月光洩れ来て木犀の匂ふ

藤剛

ています。 忙しい日々の生活の中ほっと一息安らぐ静かな心を詠まれ

陽が落ちて涼風そよぐ草むらに虫の音ありて帰途の足止む

梶川喜與志

た。豊かな感受性の大切さを教えられました。ている繊細なお心をお持ちの方と思います。前者の遠藤さん共々自然の中の匂ひ、音に心を動かされす。前者の遠藤さん共々自然の中の匂ひ、音に心を動かされまむらの虫の音、心安らかでないと気づかないと思いま

何となく何もしたくない午さがり街に一鉢秋桜購ふ

川村 貴美

句の具体が心を引きつけます。中閑ありほっと一息つかれて居られる姿が浮んできます。結中閑ありほっと一息つかれて居られる姿が浮んできます。結

傷つけぬ言葉を選び語りゐる茶房の中のエアコン寒し

木村百合子

話ではないかと思いました。息のつまる雰囲気を感じました。この歌に引かれました。結句のエアコン寒しで緊張の中の会私は考えなく言葉にして失敗したと反省する事が多いので

・玉石の狭間を抜けて気泡沸く法師秘湯の湯のやはらかし

髙崎 邦

す。結句の大事さを学ばせて頂きました。かしでほのぼのとした暖かいお幸せなご様子が伝わってきま多くの文人の訪れた温泉と聞いています。結句の湯のやはら法師温泉は弘法大師の開湯伝説のある関東屈指の秘湯で、

夜の闇を怖れし疎開の日々ありて明け待つ心今に残れる

•

戦没者のみ霊の祈り敗戦を生命の限り伝へゆきたし

てはならない、風化させてはならない戦争でした。おられます。詠み残すことの大切さを教えられました。忘れての二作品はつらくて思い出したくない戦争体験を詠んでこの二作品はつらくて思い出したくない戦争体験を詠んで

老い夫の介護に昏るる陣中見舞と吾に歌の帖妹より届く

月田

いと思います。 お疲れでしょうが体験者でないと詠めない歌を詠んで頂きたけて居られる和やかな御一家です。介護は心身ともに大変でけて居られる和やかな御一家です。介護は心身ともに大変でました。介護でお忙しい作者を妹さんお子さん方が背後で助味さんから贈られたすばらしい歌集の帖を拝見させて頂き

今頃は師と金子さん遠き日の「太陽の舟」語り居るらむ

土屋 道子

く伝わってきます。心打つ挽歌です。師・友・「太陽の舟」を大事にされている作者の気持がよ

<u>+</u> 月批評 (作品Ⅱ)

Ш 本 賀子

短 ても激しき生涯松蔭の松下村塾二間の粗家なり

富原 澄枝

事情と考え合わせて感慨を催されたものと思います。 き維新の志士を輩出しました。粗家二間の教場は現代の教育 松下村塾では身分の分け隔てなく、 吉田 |松蔭は安政の大獄に連なり斬首刑になりました。 進歩的な思想と学問を説 私塾

信のひと藤井武徳おのが信枉げることなく生き抜きにけり

松岡 三夫

を見習いたい一首です。

みじみと感じられます。 首は藤井氏のお人柄と共に結句の詠嘆に作者の惜別の情がし 入れた時、亡き友の徳を偲んで七首を詠まれました。右の一 に作者はその死が今でも信じられません。 藤井武徳さんが、 急逝なさいました。 追悼の記にあるよう しかしそれを受け

傲慢と自負心捨てて善行を吾れの日日とし初夏の風吹く

勝

を致します。 のうちにも傲慢な自負心に己れを恃み、支えられて頑張りま 人は皆、 しかし作者は、人生の充足と共に善行する生き方に思い 知恵と力を尽くして精一杯生きています。 初夏の風は爽やかに清々しく感じられたことで 三木 無意識

肥後の守使えず泣いた娘は母にこだわりて今鉛筆削る

しょう。共感を喚ぶ作です。

母親が厳しく使い方を教えたものです。作者はその懐かしい 鉛筆を削るのに用いました。危険を伴なうのでどこの家でも、 風景と親子の会話のあたたかさを歌にされました。 肥後の守は 「肥後守」と銘のある小刀の事で、小学生でも

村田

一枝

早朝の一宮川葦の辺に久びさに聞くヨシキリの声

ました。早起きをして旅先の自然に触れようとなさった作者 川の葦辺にヨシキリのはっきりした鳴き声を聞かれて詠まれ 「早朝」とあるのは、一宮全国大会二日目の朝早く、一宮

• 甘やかな乳の匂ひを漂はせ日ぐれは嬰児おもひつきり泣

山田田鶴子

から出てくるのかと思われる力強い泣き声までが聞こえてく しい赤ちゃんの様子が目に浮かびます。 さと、それを見守る家族の優しさが快く響いてきます。 るようです。結句の「思ひつきり泣く」によって、命の豊か 作者のひ孫さん、「甘やかな乳の匂ひ」それだけで可愛ら あの小さい躰のどこ

・戦死せし兄二十なり秀麗の若き眉して生家の佛間に

湯本

りました。戦争を風化させず子や孫に伝える責任を感じます。 戦死と言う虚言をもって泣くことも許されなかった時代があ け止めてみれば、これ程の悲しみを他に知りません。名誉の 感情を抑えて詠まれていますが、 作者の情感をしっかり受



司会 伊豆支部会員の緒方善丸会員の 回は、昨年の十一月号から四首を選んで行います。一首目 り新メンバーで始めます。どうぞよろしくお願いします。 新年 おめ でとうござい います。 月から 評 者が交替とな は 今

シャッターの前で健気に声上げる露天の子からかき氷を買う

に声を出している様子が見えるようでした。 **S** 商店の閉じたシャッターの前で、露天商 です。如何でしょうか。

こた。初句を聲天商の子供が

「シけ

ヤ な

ッ げ

Υ

ター ı な空間を詠んでいるのではありませんから。 Т この作者の七首を全部読むと、 「シャッター」だけでよいと思いますよ。 街」にしてみてはどうでしょうか。 お祭りの情況が 街 ٤ ぶよく 1) ・うー 大 き

う感じがしました。 りましたけど、この一 首だけだとお祭りの中のごく一 部とい6くわか

S ているという時事詠でもあり、 した方が良いと思う。それと、 も良いと思ったし、結句の「を」は取って「かき氷買 的に、「小さな声上げる」とか「手招きをする」とかにし Υ 私は「健気に声上 そうすると、 一首の独立性 |げる」が気になりました。 シャッター 大事な歌だと思い が問題 定になっ 街が増 てきます 」とかにして ^{恒えてしまっ} さ氷買う」に 、ます。 ね

なり 者は健 無い悲しみが詠まれている。他にもかき氷屋があるのに、なって客を呼び込んでいる露天商の子供の、一種言いよう お 感情移入をしているのがわかるし、上句との整合性も 2祭りの日でもシャッターを閉じている家の前で、 つ |げている子供からかき氷を買っている。 ぞ、 言いたいことが多岐にわたって 必死

> る。 **会** では、 次は月の船支部の手塚ミツエ会員七首の中で一番良い歌だと思いま 0 す 灯 ij

司い

得意げに鬼灯ならす亡き姉を夕べ に送る生者の

です。どなたからでもどうぞ。

S していた、 すくてなかなか難しいの。亡きお姉さんが上手に得意げになら から、中身をそっと出してならすのですけど、それが破れやでもわかっていると思うのですが、指で丹念に柔らかくして 子供の頃、 鬼灯のことは私もやりましたし、 というのは目に見えるようでよくわかりまし 男の私だって鬼灯をやりましたよ。 年 酡 この女性 でし たら誰 た ね。

Т お姉さんの子供の頃の様子だから、 過去形にして「 なら

てみます。「得意げに鬼灯ならす杳き日の姉を送りぬ生者のいたのは子供の頃のことだと思うので「杳き日の姉」と変えので「亡き」は取り、それから、お姉さんが鬼灯をならしてT 「亡き姉」と「生者の灯り」がだぶっている感じがするせし」のほうが良いと思う。

Y 「夕べ」も取ってしまうの灯り」に直してはどうですか。 「夕べ」も取ってしまうのですか。

Т だいたい送り火を焚くのは暗くなっ てからだと思うの

で

すね。 Y 「生者の灯り」でお盆取ったほうがいいですね。 「生者の灯り」でお盆の送り火だということが わ か n ま

生者の為の灯りでもあるのですね。 Υ お盆の迎え火も送り火も、 死者 のためでもあるけれ

S

鬼灯の

灯」と生者の「灯り」

の対比が良い

です

らみじみと詠み心にとどく歌となってい 鬼灯を鳴らすのが得意であった姉 を 、ます。 盆 の灯 を送るなか

に

三首目は、 渋谷支部の中村陽子会員の

司 l 1

の輪廻のかたち蝉 しぐれ聞きつつさくら葉ほろほろ

| 上 難 こい次でする。 | と散る を取り上げます。如何でしょうか。

「この飲は、さいる」

を詠み、構成が二重構造でなかなか上手い歌です。しぐれ」を三句目にもってきている。二つの「輪廻のかたち」の輪廻のかたちで、さらにもう一つの輪廻のかたちである「蝉ー」この歌は、さくら葉がほろほろと散っていくのが鎌倉山

けど、違いましたね。それが「輪廻のかたち」になるのかなァ、と思っていました大勢の人が鎌倉山のあたりで死んでいるし、首塚もあるので大勢の人が鎌倉山のあたりど、鎌倉山は固有名詞なんですね。

になればなるほど早く葉が散るそうですね。らの葉は散りはじめていたということですね。さくらは古木S 「蝉しぐれ」というと夏ですけど、この歌の時にはさく

いるのは誰でしょうか。 - 私は「聞きつつ」がどうしてもひっかかります。聞になればなるほど早く葉が散るそうですね。

1)

7

思います。「ほろほろ」というオノマトペも良いし、かなり高度な歌と「ほろほろ」というオノマトペも良いし、かなり高度な歌とぐれ」を聞いているのはさくらの葉ということになります。「 この場合、「聞きつつ」はさくら葉にかかるので、「蝉し

S 「輪廻のかたち」というのはどうでしょうか。この歌は、通り一遍の読みでは理解できないですね。

のでこのままで良いと思う。 T 蝉には蝉の輪廻のかたち、人間には人間の輪廻のかたち

ら 「かたち」を漢字に直すとどうなりますか。例えば「容

司会 四首目は、千葉支部の渡辺幸子会員ののままの平仮名で良いと思います。 エ 無形のかたちだから、「容」でも「象」でも無いし、

?く「です。どうでしょうか。土田波寄せては返すどどどどど真砂女の句碑に寄り添ひて

Т しいと思う。 この歌は は「真砂女」と「などうでしょうか。 真砂女は俳人です こと「旬 o が わ から な 1) 논 歌 評 が 難

Y 私は今、瀬戸内寂聴の「いよよ華やぐ」を読んでいます

後、 Т たんですが、 旅館の女将となった三十代の頃からだったと思う。だですが、その後いろいろあって俳句を始めたのは妹 「どどどどど」は土用波の音ですね。上手く作っ 真砂女は鴨川市の吉田屋という旅 館 の次 女とし りは姉 7 た な ま 死 ア れ

と思いました。面白い歌ですね。

S 私は「どどどどど」の表現に強いインパクトを感じ、とり高い波が寄せているので、この「どどどどど」が生きている。り高き卯波かな」の真砂女の句碑が立っていて、実際、岩よT この歌の場所は鴨川の仁右衛門島で、「あるときは舟よ

ても驚いてしまいました。

Y 土用波って、夏でしょうか、秋でしょうか。るというか、呼応していてとてもいいと思います。このオノマトペは、真砂女の波乱な生涯と響きあってい

て下句がちょっと弱いです。 T これは秋の土用波でしょうね。歌としては上句にくらべY 土用波って、夏でしょうか、秋でしょうか。

Y 作者は句碑に寄り添っているけれど、真砂女に寄り添

司会 本日はこれで終わります。どうもありがとうございまでもなんとなく憧れがあったのだと思います。えて詠んでいるし、真砂女のようには生きられないけれど、えつです。作者は勉強家だから、真砂女の事を全部踏ま

(記録・山田紀子)一年よろしくお願いいたします。

河野 靜子

認知症笑顔で応ゆる親子あり我が心まで温かくなる

狐塚 秀子

に

三十三回忌重ねし義父の法事かんばせ似し人なごみて集ふ

小貫 昭

塩田 秋子 奥多摩の施設に逝きしわが母を詠はず来たり奥底におき

外したるマフラーわれの首に巻き就職せし孫帰りゆきたり

究極は人こひしくて古風なる茶房の隅にひとり坐りぬ

近藤 リイ

庄司 久恵

鳥たちの飛び立つ朝とおもひつつ家族の数の魚を焼くなり

辛辣を人は好まず分別とふ虹彩の中に本音をしまふ 末次 房江

る

武田 節子

☆熟れてゆく稲穂のすがた祈りにも似むふかぶかと匂たちく

玉川

愛子

る

より帰る

生き越しのかなしき船を恋ひこひて老夫は三ヶ月のスティ 月田 藤枝

> 選者 土方 澄江

葦原に霞ヶ浦の波響き戦にかけし命のとほき

石塚

立

青空に刷毛で描きたる白雲の細くたなびき秋の風吹く 我が部屋をじっと見つめし幼子の確認できたか笑顔しきり 伊藤

モト

上田やい子

草引きしあとをいく度も眺めゐる誰も知らない小さな喜び

朽ちし木に苔の生いたる中辺路の熊野古道の深き山道 なった。 江面 伸子

帰るなり厨をのぞく孫のため気合を入れて大鍋ゆする 北川

旅出来ぬ脚もつわれには有難くテレビ桟敷で阿波おどり観 近藤

IJ

1

砂時計ひつくりかえそ新しい時が始まる重力の思想

原田 土橋 茂徳 寛

刈田あと白鷺舞いおり餌あさる畦にこぼれる稲穂のみどり

五貴雄

山田田鶴子

甘やかな乳の匂ひを漂はせ日ぐれは嬰児おもいつきり泣く

昭

IJ

ょ

んか

幸子

蓮の花ひと片こぼし崩れ咲く水郷の水ぬるく香の立つ

選者

酒向

次

日に重く日に日に歩幅狭まりて老いは足より来るとは聞け

石塚 辛

伊藤

る

ハーモニカ吸うては吐いて奏でるは小学唱歌日の丸そめて

尾上 貴子

何気ない言葉ひとつがつかえおり石など蹴りて今日は捨て

黒羽 紘子

なげかざらむ昨日は今日の昔とは忘れ忘れてけさのめざめ 鶴来けい子 鴉啼き悪いと老婆つぶやきぬ聞くことのなき古き言葉を

二反田 實

苦労したここまでくるに無農薬でも良かったなあ喜ばれて 藤井 武徳

一夏すぎ油ほたほた流れでるサンマの煙至福の夕餉 宮島マツエ

山名 恒子 熟るるなきトマト穿ちて手折るとき緑き水噴くいのちの在

合歓の木が生きものの如葉をたたむしばし見つめて残暑の 湯本 ر) ح

日暮れ

り処

秋風の沁み渡る朝沙羅の木に溜息のごとき返り花咲く

病みて聴く風の唸りは棄て切れぬおもひの丈を又もいたぶ 木村百合子

悲しくも逝きし人のみ憶ふまじ友垣新た築きて生きん 井上満里子

小貫

昭

☆熟れてゆく稲穂のすがた祈りにも似むふかぶかと匂たちく

荒道に咲く山ゆりは美しき手折らむ人の無きを祈りて る 玉川

愛子

前向きに日毎生きむと思ひつつ生くるは難し日記につづる

終となる住み処も哀れ濁流に吞まれ果てたる老いたる命 福地 啓子

育ちたる巨きオクラを汁の実にみどりの星形舌にまろばす

松木

昭子

松本

垂直に水噴き上り光吸ひ小さく短く虹が生れたり

ウインドに写る姿をわが影と認むるまでの瞬時の戸惑い 山田田鶴子

湯本 りと 二反田

實

髙 﨑 邦 彦

く続けり 家しきもの持たざるごとく咲き盛る土手の曼珠沙華赤

散りかさむ落葉踏み行く城跡に滅びしものの咳を聴く

思」の風景はこの一点に収斂する為にあった。「う かったのはやはり母の事。言わば全編を流れる「秋 中で歌い続けて来た作者が最後に歌わねばならな 悲しみが深くなる。 き生きとした姿を暗示させるからこそ栄枯盛衰の 二首目 い知れぬ力を与えて存在し続ける。 徴として詠む事で、後に続く秋の寂しい歌群に言 いて詠まれる曼珠沙華の赤の群生を盛りの生の象 歌は異彩を放つ。ともすれば人の死と深く結び付 を含んで深い。 深さは違う。 あった。表題の して私達は連作の力を知る。作者は岐阜支部の人。 や」が悼尾を飾る。 ろこ雲流るる夕辺どの雲に昇天の母拠り給へる つの「愁思」はうれいおもうこと。 草支部の修練の深さを思う。 巻頭二十五首 「滅びしものの咳」も、その生の盛りの生 しかし全編を流れる思いは「愁思」 そんな中で抜芳歌 「秋思」 「秋思」は読み応えのある歌群 そして生の終焉を秋の風景の 十分に秋のものおもいを堪能 は秋の物おもい。 「曼珠沙華」の その寂しさの 例えば抜芳歌 もう で

> ん是非歌を作って送ってほしい。 れる事を心から歓迎する。 を知っている。こうして歌を詠めた時に出してく しその心はいつも太陽の舟とある。私達はその事 の衰えから、足手纏いを嫌って会を離れた。 子と呼んでくれたと自認する伊藤さん。 を決して弟子と呼ばなかった阿部先生が、 1) だ仲 私 達は忘れ 間は永遠に私達の な 1) 0 度でも 仲間だ。多くの 会を離れた歌友の皆さ 緒 に太陽 その体力 教え子達 0 舟 しか を

久に逢いし古希路の友ら三人の別れの握手の思わぬ力

君塚

存在。 握手の力に集約させて深い。 情の証し。そしてあるいは今生の。 結句の力強い握手がある。 ら変わらぬ心情ではないかと思う。 時間を一挙に越えて同じ時間を共有する不思議な 友であると言う。 その友等は遠来の友であり、 孔子以前、 人間が人間として自立した時か 友とは何年会わなくても会えば この握手の強さこそ友 万感の想いを 病を披瀝 だからこそ、 する

しきは退会三年なほいまだ忘れ去られぬ事にのみあ

英一

風は涼やかになり、

空気は澄んで来る。だ

前々号 (299号) 秀歌抜芳

深井戸より汲み上げし水出穂に大事に使えと田の神 0 0 な赤に変わる。 目が素晴らし 微妙な風と風 () 景の変化を見逃さず表現した歌人 なかなか暑さの消えぬ晩夏のそ 込山

が

から今までどこかぼやっとしていた落日もあざや

言う。 第四句の み上げるのだ。昔から大変な労力だったに違いな 水が無ければ穂は付かぬ。 たりは八月初 両方を掛け、 八月下旬はもう稲刈を終える。 だからこそ水の大切さが骨身に染みている。 。私の住んでいる鴨川は六月中旬が出穂期 穂 (しゅっすい)」とは稲 「大事」は水が大事、水を大事に、その 結句を飄々と纏めて土に生きる者の 旬が出 .穂期か。とにかく夏の盛り、 その水は深井戸より汲 作者の住む岩 に穂の付くことを あ で

たり 外したるマフラーわれの首に巻き就職せし孫帰りゆき ?強さを詠い上げた。 リイ

七首の中から読み取れる。そして、 る今、就職した事が作者のどれ程の喜びかも理 にしている事も良く分かる。 がかわいくて、 来る。 この孫 の所に来てくれる孫である事が「就職せる孫 抜芳歌、 は料理がうまくて、一人暮しで、 孫が訪ねて来てくれる事を心待ち そんな全てを呑み込んで孫は 就職氷河期と言われ 祖母は大変孫 よく相 解

> 分の た。 もうそれだけで私も涙が止まらな `巻いていたマフラーを作者の首に巻い 7 帰 票

投票を怯えつつするアフガンを想いつつ書く夢の

主 か。 夢を見れる。苦い夢の一票だ。 アメリカと表面的には対等をよそおう日本はまだ ナムと言われるアフガン。 不正は多く絶望的状況は変わらない。第二のベト ほとんど変わらぬ政治体制への絶望的選挙。 選挙であった。一方アフガンはテロに怯えながら、 今回 |義が腹立たしい。そんな思いをにじませながら、 自国のことは自国に任せよ。 一の日 本の選挙は初めて政権交代が実現する 他国がなぜ介入するの アメリカの大国 鈴木

あまりたり 畑 「八百屋差し出すほどのものもなくころがる南瓜手に 杉山

手に渡り食卓に上る。 作物を作る。 \$ に野菜が無 心引かれるのであろう。 かつて畑を作っていたのでこの夏の畑の荒涼感 南瓜だけが枯 [来た色々な野菜は八百屋よろしく近所の人々の か心に残る。作者は独り身。 「畑八百屋」とは、 べく荒涼とした感じになってしまった。 野菜は順番に実ってくれない。 れた蔓の下にころがっている。 耳慣れない言葉。 しかしもう夏になって、 しかし畑で色々な しかし何 多く 畑

髙 﨑 邦 彦

翌年を約して燃やす「送り火」に羽音一しゅん闇に入

夏は死者を悼む季節。作者にとって亡き夫は永遠に悼み続ける人。私は作者から、夫と一緒に行った旅の話を聞くのが大好きだ。きっと毎年「迎った旅の話を聞くのが大好きだ。きっと毎年「迎った旅の話を聞くのが大好きだ。きっと毎年「迎った旅の話を聞くのが大好きだ。きっと毎年「迎った旅の話を聞くのが大好きだ。

<

れ 永野 昌子 汗にまみれ草とる顔をふと上げる風沁み渡る秋の夕暮

私も畑仕事の大半は草取りである事を身を以て を験した。夏休み、二週間程畑に出なかったら長 が見えなくなる程一面草だらけで絶望感を味わった事があった。作者もまだ暑い日中、汗まみれった事があった。作者もまだ暑い日中、汗まみれった事があった。作者もまだ暑い日中、汗まみれった事があった。 になりながら畑の草を取っていた。いつしか夕暮 になりながら畑の草を取っていた。 で着はその時、身に沁み渡る涼風を感じた。 労働をした者だけが知る喜び。その時秋を感じた。

をり 長沼 温代蚊の命幾日あらむや血を吸ひて飛びたちし後痒み増し

度卵を産むそうだ。この蚊は何日目の何回目の吸えば二、三日おきに、三、四回血を吸って、その都たい盛夏の頃で二、三週間、その間人などに出会蚊の寿命は種類によって多少違いはあるがだい

夕餉終へ夫と見入る写メールの幼の笑顔にまた勇気わる。刺した蚊の命を思いやる作者の感性が暖かい。

どめパッチ」なるものも売っており、これを貼る

血だっ

たの

か。

考えると楽しい。

最近

は

かゆ

とかゆみが無くなる。

蚊も進化するが人も進化

当に孫とは不思議な存在だ。 に喜びたい。 0 来ると仲良くなると言う歌を読んだ事がある。 人目の孫が出来たので三日にあげず写メールが届 ないらしい。私達の場合は一方通行であるが、二 は持っている。妻も受信は出来るが、送信は出: 段と身近になった。 天与の感情なのだろうが、 最近写メールなる便利なものが かつて夫と喧嘩していても娘から写メールが 私は携帯を持っていないが妻 抜芳歌のように素直 人類が滅亡しない為 があって**、** 原武 孫が 本

潮騒の静けさ満ちて雨の降る九十九里浜傘さし歩く

深谷

と言う。 降って潮騒の音を消しそこは静けさに満ちている 九十九里浜は太平洋。 も波は高 !の砂浜に寄せる波は細波。湖のような静けさだ。 六月の全国 あるいはその時の歌か。 雨は風の音を消し、 く潮騒の音も大きい。 天会の一日目。 潮騒は大きい。しかし雨が 太平洋は風が無くと 九十九里浜は雨だっ 雨は波の音を消す。 夏の風の 無い日本

前々号 (299号) 秀歌抜芳

か もの つてなき起き伏しの痛み言ひ難し存へて知るこれ 神がここにはあ 松本 啓子 ŧ

自然界の小さな変化にも敏感に反応する歌人の精

る。

も毎 と辛さがあるであろうか。 け入れている。 あると。作者は一人で住みながら、 みも存えたからこそと知る。それは天の賜もので それを聞く度に長寿は望まぬと思う。 いで生きようと思う。 にある魂はまったく異質のもの。 私が長く生きられたら、 生き存えると言う事は痛みに耐える事か。義父 日毎 ?日体が痛い、生きているのが辛いと言う。 そこにはどれ程の心細さと寂しさ 思うだに恐ろしい。も 永遠にこの歌を忘れ この言い難い痛 この痛みを受 しかしここ な

傘寿などお年寄りの入口で天気晴朗なれど波高し

宮島マツヱ

と読めるではないか。この下の句の言わんとして をして来たのだからこれからの人生勝利疑いなし 芳歌、八十歳を老人と言えない。 率は高い。 高くても訓練を積んでいるので艦が揺れても命中 海戦直前、 いることは、 天気は良いので視界は良好射撃がし易い、 天気晴朗なれど波高し」は日 勝利疑いなし」の意味。 秋山真之参謀が大本営に打電した文。 常日頃よりより良く生きる為に努力 長く生きる訓 露戦争、 したがって抜 日本海

人とも薬は を怠るなという事なのだ。そう言えば、 一切飲んで無いと言う。

水たまり躊躇ひもなくまた跳びて幼子前へと今をすて 山田田鶴子

ようと言う作者の決意が裏にある。 て背負ったものの重さ。 に後を見て生きている思いを強くする。 唯前を見て生きる命の美しさ。そして老人我は常 たすら前へ前へと進む。 水たまりをためらいも無く飛んで行く。 5の動作を見詰める作者の目は歌人の目。 た様で喜びこの上無い。 この幼子は初孫であろうか。二人目の孫も誕 しかし私も前を見て生 その姿は今を捨てながら 抜芳歌、 そんな愛しい 長く生き そしてひ 次々と

茶をたて飲みぬ 会を去る」突然聞きてただひとり〈わらや写し〉 吉岡悠紀子 に

心が友に伝わる事を祈りたい。 写しなら満足出来る。 入っていると言う。 らや」茶碗の写し。 写しは陶芸の手法。「わらや写し」とは織部 がら極限まで自分の主張を入れないこと。 る模倣ではない。写すとは先人の想いを想像しな 「写し」とは先人の作品を再現する事だが単 去って行った友に思いをはせる。 本物でなくても十分に勝れた 作者はその写しをいたく気に 作者はその写しに茶をたて この作者 だから の「わ な

―最初は末席でおろおろしていたのに―そうか―もう三十年も経ったのか

尚 﨑 邦 彦

父の死を、 号の前号批評で 号「死の淵から」二十一首が私の初出である。 勧めて下さったのだと思う。昭和五十四年二月発行通巻第四 た。だからこそ先生は父の思い出を残せと、 んでいらっしゃる実父と比較して感動したと話してくださっ 譲り、黙って下座に坐った。その事を先生は何度も秋田に住 先生とお二人で能登を旅した時、父は囲炉裏の上座を先生に 私に短歌を創る事を勧めて下さったのは、阿部先生であった。 ・ジに、私の畏友石井秀男の「終焉」二十一首が並ぶ。 もう三十年も経ったのか。真実驚きの気持で一杯だ。 -十二月三日、父が死んだ。葬儀を終えて帰って来た 石井は友の死をそれぞれ詠んだ。石井は通巻第五 短歌を創る事を 同じ号の次ペ 私は 昭 和

・働きて働きて尚働きて痩衰へて父は死亡たり・死と言ふはあまりに軽き臨終の断末の余韻舌に残れり

題したこの一連、批評を拒む程の作者の万感の想いがストレベがブッブッと切れている難点はあっても「死の淵から」と技法の巧みさにつけ入る余地がない。歌として表現が固く調慟哭を耐えようとする無言の慟哭がある。この重い素材には一首の完成度はこの世界では大事な問題ではない。ここには一首の完成度はこの世界では大事な問題ではない。ここには

ートに伝わって来た。

の 二 輩達、 くて恐くてたまらなかったあの時の気持を忘れる事が出 坂本龍馬、皆一流の人々は早逝し、 初はほんの末席でおろおろしていたのにと、去って行った先 埋めていた。そして、なぜ私がこんな事をしているのか つ らこそ会員の歌を一所懸命批評しようと努力した。 だと自分に言い聞かせて耐えて来た。 ん私は二流の人。明治維新も吉田松陰・久坂玄瑞・高杉晋作 い。文体を真似、 がお亡くなりになった後を受け継いで書いた秀歌抜芳の恐か ない。むしろ、 なった。私は三十年経った今も歌が上手と思った事 た事。今でも二〇〇一年八月号の会員の皆さんの |流の人が維新を成し遂げた。歴史とはそういうも お亡くなりになった先輩達を怨んだりもした。 じた。 いつも自分は歌が下手だと思って来た。 私にはこの批評が何よりうれしく心 唯恐怖に打ち勝とうと原稿用紙のマス目を 伊藤博文や山 形有朋など 阿部先生 反応 は一度も の支えと しょせ Ŏ なの 案な

たからであろうと今は思う。

一大年とは真実長い。当時私はまだ三十一歳だった。教師三十年とは真実長い。当時私はまだ三十一歳だった。教師とは第一に阿部先生への尊崇の念、それと会員の皆様の人間とは第一に阿部先生への尊崇の念、それと会員の皆様の人間としての素晴らしさ、利害を超えた人間関係の心地良さがあったからであろうと今は思う。

に心からの感謝を申し述べて記念の年の初めとする。 三十年間の思い出は尽きない。しかし、今回は会員の皆様

文法講座

文語で短歌を詠む人のために (十三)

奥 田 清

(3)す・さす・しむの活用型は下二段型である。

| 用言の未然形 | しめよ | しむれ | しむる | しむ | しめ | しめ | しむ |
|--------------|-----|---------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 右以外の動詞 | させよ | さする。さすれ | さする | さす | させ | させ | さす |
| 変の未然形四段・ナ変・ラ | せよ | すれ | する | す | せ | せ | す |
| 接続 | 命令形 | 已然形 | 連体形 | 終止形 | 連用形 | 未然形 | 基本形 |

は シ・ラ・ナ未接続である。

※「す」「さす」「しむ」が、「尊敬」の意に用いられるときは、「た 見分けねばならない。 併用されている場合は、 いられた「す」「さす」「しむ」は、「使役」の意味である。 まふ」・「おはします」・「らる」など、他の尊敬語と併用さ 単独で用いられることはほとんどない。で、単独で用 前後の関係から「使役か尊敬か」

……になる)の助動詞があった。 奈良時代に用いられた四段型に活用する「尊敬」(お

打消の助動

この丘に菜つます児、

家聞かな、

名告らさね。

(万葉巻一)

打消 (ない・ぬ

ず

ビルディングの入りの扉うす青く人が押さぬとき死者凭れ スモス(俵万智「サラダ記念日」) やさしいね陽のむらさきに透けて咲く去年の秋を知らぬコ 山あひの平は未だ陽の射さず寒天干す人の息白く見 言訳など言はずに帰り来し夜を細く鋭く鉛筆削

蓮根掘る男の影の動かざり薄ら氷照らす逆光の中 をり(高野公彦 (淡青」)

※活用の型は特殊である。元来は三つの活用、 型(ぬ・ね)と、無変化の(ず)。さらにラ変型(ざり活 再びは都とならざる志賀の里疎水の流れ京に向きゆく ナ行四段活用

を一つの表にまとめたものである。

基本形 ず 未然形 ざら ず 連用形|終止形 ざり ず ず 連体形 ざる ぬ 已然形 ざれ ね 命令形 未用 接 然形の

※奈良時代には、未然形に「な」、連用形に「に」という形もあ た。 られた。) (「な」は**、**接尾語「く」を伴って「なく」の形で用

くに。(万葉集、巻五) 妹が見しあふちの花は散りぬべし。 わが泣く涙いまだ干な

(妻がながめたあのせんだんの花は散ってしまったことだ

べき方法もわからないくらいに……) しあるらし。 言はむすべ、せむすべ知らに、 ろう。妻の死を嘆く私の涙もまだかわ (万葉集、 巻三)(言うべきことばも、 きはまりて尊きものは酒に かないのに。 ほめる

作 0 目。作 歌 の技法 (第六十

歌の技法 (初級編)

勝

歌を作ろうとする時、次の段階ではどのような点に気をつけ読むことの、このふたつであった。このふたつを踏まえて短 五七七の定型を遵守することと、もうひとつは、己の感動を 一歌を作るにあたって、重要なことは、 短歌の形式の五

五七五七七の形式を守り、

自己の感動を表そうとする

ればよいのであろうか。

五の部分と七七の部分に分けることができる。 る。では、短歌の構造はどのようになっているのであろうか。 ぞれの機能の働きに応じた働きをさせるようにすることであ である。短歌の構造を把握し、それぞれの部署の機能をそれ 次に気を付けなくてはならないことは、短歌の構造への配慮 短歌は、 |七五七七の形式を守り、自己の感動を表そうとする時 五七五七七でできているが、大きく分けて、 五七 に

切っ掛けとなった事象を作者の主情を交えずに淡々と述べる あるがままの状況を叙述することである。 物を語るための構造が起承転結なのである。 は何かを物語るのである。何かについて、物を語るのである。 中に物語を作っていくようにする。 短歌の流れは、起承転結でできている。起承転結で一首の 一七五を起承の部分とし、七七の部分を転結とする。 は、 叙事を歌う。 叙事とは、 つまり一首の中で、 見たまま、 叙事では、感動 感じたまま、 起承 作者 0

> き、名歌に真似ぶことは効果的な学習法である。 などをもって結ぶのである。この構造を意識して名歌を紐解 へと歌の世界を転じる。そして最後の七で作者の主情 切っ掛けを踏 七七は 転結の部分を構成する。ここでは起承に まえて、七七の前の七で、 作者の 主情 おける感動 · 決意

を研ぎ澄ませて行く訓練をする事が、肝要である。 ると述べたが、その次に大事なことは、感動を的確に表現す 気を付けなくてはならないことは、短歌の構造への配慮であ 何かを自覚し、その感動をいつでも捕捉する事ができる感覚 ることである。そして短歌で表現しようとしている感動とは

人は、 真実を述べる歌を作らせる。 こない。感情における微妙な動きを捉え、増幅させる力量が、 思っていたのでは、 ちは偶にしか〈感動っていくのである。 とが、どのように、どのような歌を読むのかという事に連な である。その感動のどの瞬間をどのような視点で切り取るか いる。つまり人は目覚めて眠るまで、 の動きを感動とする。つまり感情の動きが感動なのである。 の感動に驚くのである。 である。感動のどの時点をどのように切り取るのかと言うこ 短歌における感動とは、人の心の中における感情のす 目覚めてから眠るまで、 〈感動〉を感じない。 私たちは絶えず感動しているのに、 深みのある、真実を述べる歌は生まれて 偶然に自覚する感動のみが、感動と その情は絶えず細かく動いて 偶に感動を自覚して、 ・絶えず感動しているの 7

実際の作品から作歌の技法について考えてみよう。

果たす。読者は、歌におけるドラマの観客である。 の気持ちの中へと読者を引き込んでいき、共鳴させる作用 えてきて、「しずかに受くる」という行動の中における作者 た暇をしずかに受くる」とすれば、 年の介護の母を見送りて」と母の在不在を明確にし、「今得 での「心地ふくざつ」の複雑が、具体的に見えてこない (1) 承転結の流れは、 母介護横に眠りて幾年ど今得た暇に心地ふくざつ 踏まえられている。 作者の姿勢が具体的に見 しかし七七の 観客が自

2 イダイに きのうまで探しても見えぬ柿の実がいま姿現わしうすダ

環境を整えていくことが大切である。

ずから共鳴しやすいように、道具立てを演出し、感動に導く

すダイダイに」とする。 るからである。「きのふまで探せど見えぬ柿の実が姿現すうぜなら「いま」姿を現わしたことは歌全体ですでに語ってい てはならない。「いま姿現わし」の「いま」はいらない。 声を出して歌うものであり、耳で聞くものであることを忘れ し、無駄な字余りは作らぬこと。定型によって朗誦性が高ま 見えぬ」とし八を七にする。できるだけ定型にはめるように 起承転結は、踏えている。「探しても見えぬ」は、「 朗誦性は、歌の命である。 歌は目で読むものではなくて、 「探せど な

てとなるの |想像力を自ずからかきたてていく具象がない。 起承転結を踏まえているが、猫が現ると、どうして今が全 餌つつく鳩を鴉がねらってる猫 分かりそうで分からない。この歌を読む読者 も現る今が全てだ つまりドラ

> が入っている箇所には、他の語を入れて歌に膨らみと幅を持 4 たせる事ができる。「山車の上いにしへ人の目覚めくる佐原 マとしての道具立てが不足し演出の効果が出 「れば・たら」は、原則として使わないこと。「れば・たら」 車見ればいにしえ人が目覚めたる佐原祭りの夢踊る朝 デい な

も」の「・・」は何か聞きたくなる。 「鉢も」の「も」は、並列を表しているので、もうひとつの 紅色の小菊の鉢も外に出しすぐに飛び来る蜂の嗅覚 祭の朝の明けきて」と感動の焦点を朝へ収斂してい

を

(5)

6 七七の最後の七に感動の焦点が、来るので、感動の焦点は、 刻過ぎて子供に還る母の目は病気遣い診る医師 Ó

の目の子供に還る不安のあふれ」とし、母が子供のようにな ることへの愛惜の情が感動の焦点なのでは。

診る医師の前」となってしまう。

「診る医師の前に座りし母

8 7 起承転までは良い。起承転の良さを支えるには結が 路端の虫の音低く有明の秋深まりて寒さ我が身 住宅街野火止用水流れあり蛍飼育の夢のせて ()

⑨ 高法主尾根筋にふる秋雨に見えを見せる。用水路は夢を乗せない。 水貫きて蛍飼育の夢を育む」とする。「流れ」では しか見せないが、「貫き」は用水路の幅、 流れあり」と「夢のせていく」が弱い。「住宅街野 語彙は正確 長さ、 に くう 水の流り 火止 れ

法主の」と「の」を入れ、定型を守る。 景色を順序良く描き絵画にしている。描く順序が良い。「高 に見え隠れしつ舞う群

飛騨吟行会

奥田 清

友邪圧罹り援単也ケトの全方気が行ってこ。 去る二十一年十月二十五日(日)~二十六日(月)に、岐 ・

柏支部七名、岐阜支部八名、総勢二十三名であった。 参加者は、渋谷支部二名、大田支部三名、千葉支部二名、阜支部主催の飛騨地方への吟行会が行われた。

を鑑賞した。 ガイドによる御獄噴火と巌立生成などの説明を聴き、三の滝 から巌立峡は観光客で賑わっていたが、地域のボランティア 紅葉を堪能しながら下呂市小坂町の巌立峡へと到着した。 転がる(転月) の手前で左折、 聴きながら南下した。途中、太平洋と日本海への分水嶺(宮崎) はじめ、車窓に流れる風物、地形、歴史等の案内を審らかに 四十分に高山駅前に集合、旅館の送迎バスに乗車、三時に二 崎代表御夫妻はキャンピングカーにて別行動)が、午後二時 反田会員の案内で出発、奥田支部長の歓迎挨拶の後、 (飛騨民族学会会長、飛騨ボランティアガイド)の高山市街 屋へ到着、 初日は、各地から、高速バス利用、JR利用などの二十名(髙 髙﨑代表夫妻と合流した。 巌立を背景に集合写真を撮り、 の弥陀ヶ洞山』を観て、 美女峠方面へと入り、『中秋の名月が稜線を 久々野、 バスにて旅館奥 渚の山峡の 桐谷氏

泉を浴びて、夜の宴会となり、岐阜支部(酒向、遠藤会員)浴びる四分」と云われ、飲む方が効用があるそうだ。その温小坂湯屋温泉は、日本一と謳われる炭酸泉だ。「飲む六分、

蚊を打ち、歌友と歓談、親睦を深めあった。 の進行にて**、**岩魚の骨酒で乾杯、山菜料理やソバガキ等に舌

人々もあった。 とってみごとな景だった。円空仏を探して飲泉場をめぐったといら雨だった。が、雨に濡れる紅葉はすばらしく、清流と相たら雨だった。が、雨に濡れる紅葉はすばらしく、清流と眺め翌日、二十六日(月)、谷川の瀬音で目覚め、窓外を眺め

八時三十分朝食、香りのよい温泉粥と朴葉みそが美味だった。

ことにした。主催者の た時三十分出発、雨 の故に、霊峰御嶽や穂 の故に、霊峰御嶽や穂 が、紅葉と白樺を求 め、「鈴蘭峠」を越えて、 が神、朝日の素朴な飛 野山里の情緒を味わう

不徳、山の神の怒りに石徳、山の神の怒りに原はその景の一端を垣間見たのみで残念であった。が、博学に裏打ちされた桐谷氏の説明ちされた桐谷氏の説明は、皆を飽きさせず、学ぶことが多かった。



駅」へ。これぞ山里飛騨の味と思われる土産などあり、 とり

どりに楽しんだ。

行の旅は終了した。 十一時三十分頃、高山駅へ到着、 解散・自由行動となり吟

②渋谷・大田支部の方は、二反田氏の宅へ招かれて ①柏支部七名は、そのままバスにて飛騨古川へ、さ らに一泊して、飛騨を深く味わって行かれたとか。

接待をうけ、山里情緒を満喫なさったとか。

1)

吟 行 歌

石塚 立子

透み流るる大洞川をさかのぼる薄き魚影にもみぢ散りゆく

遠藤 剛

錦繍の山また山の奥飛騨路住めば都か家々の見ゆ

奥田 清

は神にしませば易々と怒りて噴きて巌立をなす 木村百合子

御嶽

稜線を転月はまろぶとふ山の精霊悪戯なせしや

酒匂 一次

コ清とふ寒村の名知る歌友ありて岩魚酒かはす吟行の宿

浦。

幾曲がりトンネル幾つ抜けて来し飛騨の山路に耀ふ紅葉 志賀 倭子

房江

温泉粥の温み身裡に残りゐて蔦紅葉する湯屋に別るる 末次

> 紅葉うつし飛騨谿谷の河青く奥田屋の朝景現世の幸 庄司 久恵

髙﨑 邦彦

多久和玲子

全山を万化の赤に染めあげて飛騨は真奥清化粧する

滝水の譲りて放つ時の間もマイナスイオン起りて止まず 角田 順子

つの日か転月の稜線を鑑賞したく祈る毎日 富永

道子

奥田屋の蔦の紅葉を見む旅に高山線の雨くぐりゆ 二反田

月みると何かはづかし人伝へず山の端に見るころがりの丸 宮島マツヱ

三つ滝より落ちる清流清清と岩魚は群れて旅愁をそえる

山口クニヱ

八十にして歌友となり舟の会小坂の湯屋の新たなぬくもり

水清き巌立峡に流れゆく紅葉ひと葉の行方はしらず

山田

けぶりたる雨中の山に保ちつつ車窓拭ふとき紅葉は明かし 山田田鶴子

瀟洒なる飛騨高山のミュージアム紅茶の香りしばしの憩ひ 山本

山々の連なる飛騨の深き谷霧立ちのぼり天魚肥らす

實

歌帖余白(七十三)—編集雜記

松岡三夫

い搾乳業を営んでいました。石川啄木が評した風采の男は二十七歳。本所茅場町で牛を飼伊藤左千夫が訪ねてきました。「まるで田舎の村長さま」と一九○○年一月二日。東京は根岸の鶯横町にある子規庵に

にて『古今集』はくだらぬ集にこれあり候近来和歌は一向に振るい申さず・・貫之は下手な歌詠み

実朝の歌に力あり、見識・威勢もこれあり候実朝の歌に力あり、見識・威勢もこれあり候ます。『下本』とか「くだらぬ」といった表現は穏やかではない。しかし、定家の評価定まらず選はよけれど自作は悪し定家以降に門閥生じて腐敗進みおり候定家以降に門閥生じて腐敗進みおり候方へ集より新古今すこしはましだがろくな歌なし万葉以来実朝にいたりつくまで歌詠みはいず

うになるのです。やがて傾倒し心酔して『日本』の子規選短歌欄に投稿するよやがて傾倒し心酔して『日本』の子規選短歌欄に投稿するよとまるで歌うように切って捨てる正岡子規に伊藤左千夫は

子規が短歌の革新に取り組んだのはカリエスが悪化、殆どできた背景です。

的にその偉大さを発見していったのです。的にその偉大さを発見していったのです。
立く作者の詩的直感に負うものであり、創作態度はより近代なく作者の詩的直感に負うものであり、創作態度はより近代なく作者の詩的直感に負うものであり、創作態度はより近代ないたのです。
これに対する蕪村の俳句は、理論など哲学的・思索的であり、俳句も理論(俳論)を機軸に理路整哲学的・思索的であり、俳句は

子規によって、それまで王朝風の風景ばかり詠んでいた短本のひ弱さ。実証が必要です。

歌は空間詠むよりは、

少しは時間詠むに適せり

俳句で時間

詠み難し、

空間趣向詠

むにはましか

馬鹿で呑気だ歌詠みは、

俳句・川柳区別もつかず

真淵の選なる万葉はくず歌ばかり集めたるな

n

歌 会 報

本部歌会 11月例会 第 357 П

時 所 きゅ 11 月 14 りあん(品川区立総合区民会館 日 $\widehat{\pm}$ 13時~16時45分

司 場 原田 寛同人

出席者 22 名 出詠 28 首

野の寒さを思って詠まれたものでしょうと結ばれた。 す。"氷りいる橋、には、 時の先生は60時間も眠らない程のご活躍振りであったそうで 地と市街地を結ぶ橋に立っての感慨を詠まれたものです。 中の一首で、 の解説でした。この歌は『天山離離』の中の • 当地の素晴しさをお聞きした。次に阿部先生の歌では 氷りゐる橋を危ふく渡り来ぬゆきて帰らぬ旅びととし 岐阜支部主催の吟行会の報告が髙﨑代表からあ 昭 和 54 年11月訪中なされた時のもので、 かつて生れ故郷でもある秋田の将軍 (上海の群) り、 秋のご 租界 7 当 0

外出の儘ならぬ身にふりそそぐ山茶花の庭吾の秋な

本日の高点歌は次の通りでした。

脚萎えの夫の車椅子押す吾に 1, まだ余力の 在るを見定む 屋 道子

道子

11月8日 / 長須 日 正 13 時~ 16

水戸支部

長

時

予に

胡

麻うつ

婆のほっこりとつつまれてをり秋の陽と風

月田

藤枝

出 司

り上げ、歌の勉強をした。

ミニ講義は、

大田支部 支部 長 ノ庄 笥 久恵 13 時 **「**

場 所 時 大森山王高齢者センター

 \exists

11月9日

月

16時

30

分

出司 宮島マツヱ

席

7 名

出詠

7 首

第2月曜 毎月の例会は第4月曜日 日になりました。 でしたが、 今回 は会場の都合で、

はず米寿の祝膳」 III一村さんの歌「脚上げて祝ひ呉るるか活き海 を議論の結果「脚上げて祝ひ呉れおる活き 老の無惨は言

んには叶いませんが。 海老の無惨は言はぬ米寿の祝膳」と。 でも百歳を優に越して、 投稿を続けておられ

る渥美崇子さ

出場 \Box 月の舟支部 所 時 中央生涯学習センター 11 支部長 月 11 日 (未 川村 12 時 30

貴美

松木記

分 (

16

昭子

出詠

7 首

所 C ょ h ど(男女センター)

場

8名 12 首

会 席 塩田

栗名月・芋名月とてはしやぎしを記憶の底より掬う雨の夜 久しぶりの顔々も見え短歌会を開催 北茨城市平湯に疎開をされていた佐藤志満を取 しました。 長須先

0

岩橋千代子

-43-

歌の心構え・技法等の講義や、 当日は三木勝先生もお出で下さり、「短歌とは何か」 それぞれの歌に対して懇切 の作

丁寧なご批評を頂き、 かあかや篁に添う一本の鈴成りの柿オーラ発して 大変勉強になりました。

渋谷支部 長

手塚ミツェ 武田記

所 時 きゅりあん(品川区立総合区民会館 11 月 14 日 主 主 10 時 ~ , 12 時

司 場 武田 節子

席 8名 出詠 8首

気づいていく、そんな時間を過ごせたと思います。 結果として独り善がりや、推敲の足りなさ、表現の未熟さに 順番に一人一人自分の歌を読み上げ、皆で意見を述べ合い

首詠鑑賞でとても勉強になりました。 今月は志賀支部長と佐伯さん、どちらもベテランの方の七

何ほどのことはなけれどほっとする吾孫の入園言祝ぐ秋 山本 賀子 \exists

夕映えの雲をふちどる輝きにふと萌しくる希望なるもの

佐伯

朋子

支部長 / 長須 正文 12 時

時 11月15日 (日) 10 時~

司出場 所 公民館 詠 10 首

充代

穏やかに晴れ た日、 和やかに勉強致しました。

> るので具体物でまとめると良いとの言葉を学びました。 観 語 ・感動語でズバリまとめてしまうのは、感動を弱め

百日草名前のごとくつぎつぎと花がひらいて心うるおう

菅谷 孝子

(山田田記)

柏支部 長 ノ末次

時 11月20日 (金) 12 時 ~

15

 \exists

場 所 アミューゼ柏

出 司 席 10 名 Ш 田 田鶴子 11 首

易い講義をしていただく事が出来満ち足りた思いでした。 ご指導を受けました。 会の初めに「短歌とは何か」のわか り

久し振りの晴天。三木先生にお出で頂き一首づつ、丁寧な

黄に染まる桂落葉の寺庭に起し太鼓の鳴り渡りゆく

多久和玲子

陽に映ゆる落葉をかたに冬をまつ詩人のごとく木曾の野仏 玉川

【お詫びと訂正(十二月号)】

四十三頁 十七頁 下段 下段 6 行目 掲示板2行目 最期→最後 生多→喜多

四十四 崀 執筆者年間計画に変更 同4行目 屋上に避雷針を→屋上の避雷の

針

6月25首詠 々号批評 岩橋千代子→山田玲子 12 山 田玲子→

塩 田

秋子